

江戸の手習い・人づくり

——江戸庶民の人間教育に学ぶ——

【第6回】 散らし書きを読む

法政大学文学部講師、学術博士（金沢大学）、往来物研究家 小泉 吉永

一千年前の『源氏物語』で「当世風の魅力がある」と評された散らし書き。

平安時代に自由な表現方法として生まれましたが、鎌倉時代以降は、天皇が発する文書（女官が作成した女房奉書）に用いられて定式化し、江戸時代には芸術性を追求する女筆手本に受け継がれました。今回は、江戸の散らし書きを読んでみましょう。

「散らし書き」を私なりに定義すると次のようになる。

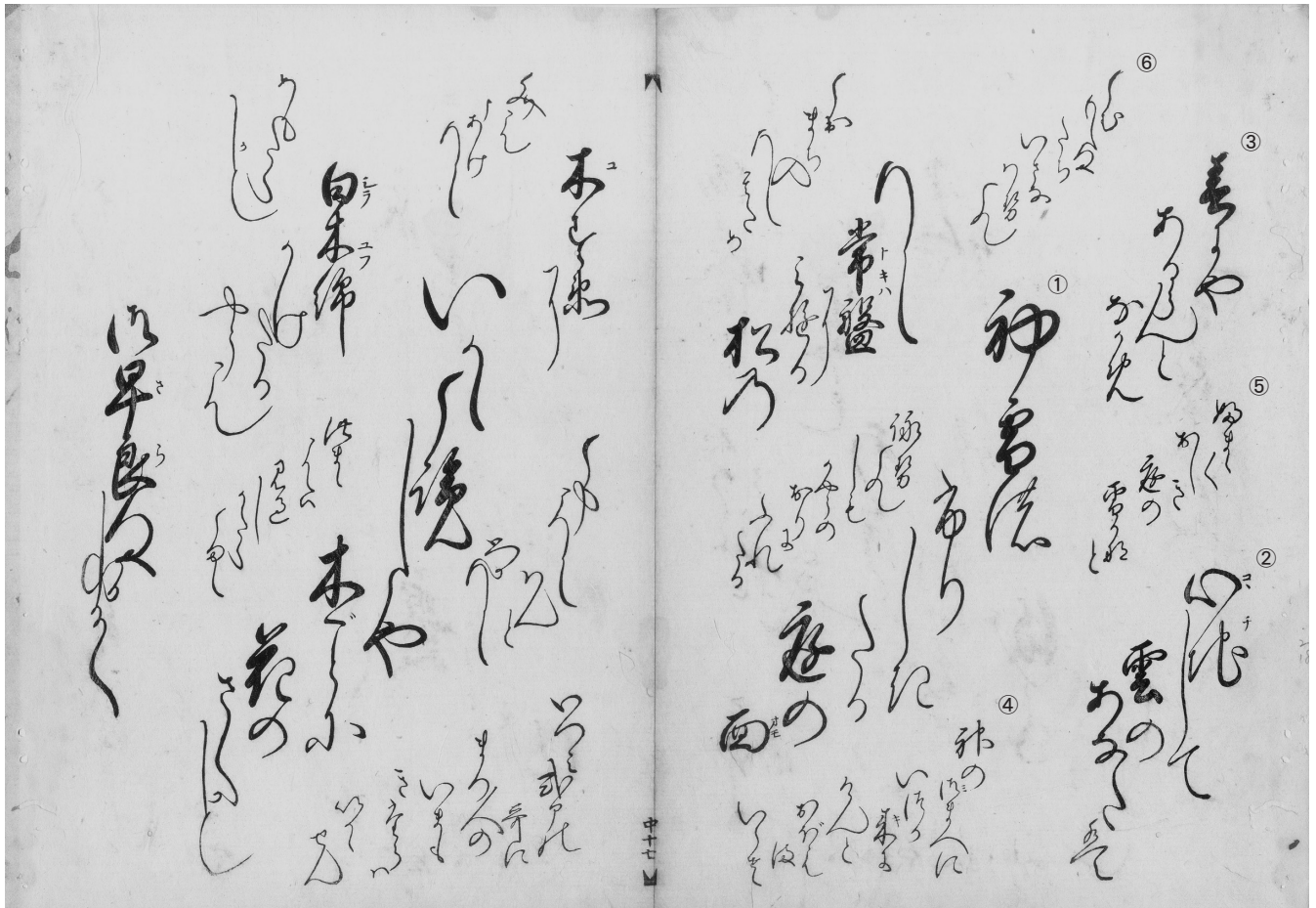
平安時代中葉に貴族社会において始まった和歌や手紙の書法の一つ。各行の行頭や行末を揃えず、また各行の文字の大きさ、行の長さや高さを変えながら散らして書く方法。その淵源は和歌または懸想文（恋文）とされ、中古では自由な表現方法であったが、中世に入ると女房奉書の書式として用いられ、やがて定式化した。以後、公武の女性間に浸透し、近世以降は和歌とは別に女文独特の書法として種々の作法が生まれるに至った。

以上のほか、実際の書では墨継ぎの配置や墨の濃淡により視覚的・立体的な効果も考慮されたように、美しい散らし書きは、相当の修練を経て初めてなし得る高度な芸術的表現であった。

今回紹介するのは、御所に仕える女性の筆跡などを集めた宝永二年（一七〇五）刊『女筆子日松』の一通である。一見複雑な五段の散らし書きだが、文字の大・中・小の順に読めばよい。ただし小字は三段に分かれていて、ここでは下段・中段・上段の順に読む（写真および読み方を参照）。「初雪に心はずませて古歌などに思いをめぐらす

うちに、あなたとお会いしたくなりました。この美しい風景を一緒に眺めて和歌でも詠み合いましたよ。せっかくですから御むもじ様（娘か）も一緒に越して下さい」という趣旨の優雅な文章である。雅語が随所に鏤められ、古歌が趣を醸し出すのに役立つ。具体的には和泉式部の「待っている人が今にもやってきたらどうしようか、せっかくの庭の雪を踏み乱してしまいかもしれない」という意味の和歌（『詞花和歌集』）を引き、彼女の心境が推し量られるような雪景色だと述べるのである。

さらに「木ごとに花のさく」は紀友則の「雪ふれば木毎に花ぞ咲きにける いづれを梅とわきて折らまし」（『古今和歌集』）を、また「雲のあなたは春にやあるらん」は清原深養父の「冬ながら空より花の散り来るは 雲のあなたは春にやあらむ」（『古今和歌集』）を下敷きにしており、いわゆる引歌（有名な古歌の引用や連想で情趣を高める表現）の技法により一層情緒的かつ印象的な文面になっているのが分かる。このように『女筆子日松』は古歌や古歌中の語句を用いた例文が多い。散らし書きは、一般に女性同士、とりわけ親しい相手への手紙に用いられた書法であって、女性が男性宛ての手紙（恋文以外）に散らし書きを用いたり、男性が書く準漢文体書簡を散らし書きにすることは異例であった。また、たとえ女性同士の手紙でも極端な散らし書きは控えるべきとされた。長谷川妙躰も「幼い者への手紙は、文字が



宝永2年(1705)序・刊『女筆子日松』中巻第16状

【読み方】

①が第1段(大字)、②は折り返しの句(大字)、③が第2段(中字)、④⑤⑥が第3〜5段(小字)。

①初雪のふりしきたる庭の面／いか、御覧じ候や。木ごとに花のさく(かしく)

②心地して、雲のあなたは

③春にやあるらんとながめ／まいらせ候。常盤にみゆる松の／木ずゑに／白木綿かけたるやうにて

④神の御まへにいつか来にけんとおぼえまいらせ候。／いづみ式部の歌に「まつ人のいまもきたらばいか、せん

⑤ふま、くおしき庭の雪かな」と詠せられしも、かやうのおりにふれたる／御事にて候はんと思ひまいらせ候。／此ま、にては見過しがたく候ま、

⑥御むもじ様たち、いざなはせられ、／御出まち入まいらせ候。其ため／文にて申あげまいらせ候。／めでたくかしく御早良様 参る申給へ

*読みやすくするために濁点・句読点などを加えています。

はつきり読み分けられるように書くべきです。みだりに見た目よく書こうとしてむやみに散らし字を混ぜて書けば、幼い者には読み分け難いものです(正徳四年刊『難波津』)と戒めるように、相手の身分や年齢を考慮して適切に用いることが求められた。散らし書きという審美的表現も、相手とのコミュニケーションが大前提であり、独りよがりであってはならなかったと言えよう。